

# OPU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OPU students



## プロフィール (Profile)

氏名 (Name) 熊野 朱莉  
所属 (School) 地域保健学域 看護学類  
学年 (Grade) 1 回生

留学先 (Name of overseas institution)  
イギリス カンタベリー  
コンコルドインターナショナル  
留学期間 (study abroad period)  
2018/2/10~3/5  
記入日 (Date) 2018/3/20

## 留学レポート Study Abroad Report

日本とイギリスの違いに驚いてばかりの3週間だった。まずは町並み。日本は木造の家屋が多いため全体的に茶色い住宅街だが、イギリスは石造りの家屋が多い。白い建物やレンガ造りのような街並み。ずっとユニバーサルスタジオジャパンを歩いているような気分だった。しかも面白いのが、地域によって町並みの雰囲気異なるということだ。例えば、海沿いのWhitstable(ウイスタブル)の街中はもっと白いし、大学で有名なCambridge(ケンブリッジ)の街中はもっと黄土色っぽい。だからどこに行っても新鮮で、同じところを歩いても新たな発見があるため散歩していて全く飽きることがなかった。観光する日は一日で100枚以上写真を撮ったほどだ。



生活も日本と大きく違った。イギリス人は夜10時には就寝していて朝7時くらいに起きるのが通常だ。カンタベリーのほとんどの店は午後6時には閉店するし、日曜日は数時間しか開店していないお店も多い。そもそも日曜日のバスは本数が圧倒的に少ない。夜や日曜日は家でのおんびり過ごすというのが前提とされているのだろう。日本のように年中無休のお店はほとんどない。店員さんも効率よりも楽しむことを前提にしているようにみえた。日本ではスーパーの店員さんに洋服をどこで買ったかなど聞かれない。雑貨屋さんに行ってコーヒーが好きかなど聞かれない。カフェに行って友達になろうなどと声を掛けられることもない。しかし、イギリスではすべてあり得る。上記したのはすべて私が3週間で経験したことだ。イギリスでの生活はゆったりとしている。イギリスで3週間のんびりとした時間を過ごしたあと帰国して久しぶりにアルバイトをしたとき、効率ばかり重視する日本はせわしないと感じた。日本で無賃金残業だ過労死だと騒がれるのも納得できる。

コンコルドインターナショナルスクールでの授業では主に英語で自分の考えを発言して伝えることが多かった。日本の学校では教師と生徒の間で上下関係があり、授業中に「会話はキャッチボールだから当てられていないときは勝手に発言するな」言われたこともあるだろう。しかし、イギリス(海外)の学校では教師と生徒が横の立場にあるため、先生が何か一つ質問をするとき、そのほとんどが誰か回答者を指定していない。失敗を恥ずかしいと思わず生徒みんなでどんどん答えていく。日本の授業がキャッチボールならイギリスの授業は玉入れみたいだと感じた。自分の意見を下書きなしで話すのは初めは少し緊張した。時制間違えないか、前置詞は合っているか、と不安になっていた。そんな私たちに先生は「ライティングの英語は文法が大事。でもスピーキングの英語はそんなの気にしなくていい」と何度も声をかけて下さった。3週間も過ごすただだんだん話しながら何に気をつければいいのかコツが掴めてくる。話すことは日頃ホストファミリーとの会話で練習できるのだが、聞き取りに関しては3週間で上達したのかあまり実感することができなかった。

私は大阪府立大学で看護の勉強をする看護学生でもあるため看護的視点からも今回の語学研修を振り返ってみようと思う。イギリス、カンタベリーの街を歩いていて感じたのは、車いすや杖を使う身体障がい者が多くみられたということだ。原因としては①全人口に対して障がい者の割合が非常に高い、②障がい者が街中で生活することが受容されている、の2つが考えられる。前者は生活習慣病の患者の割合なら考えられるが、身体障がい者としては考えにくいだろう。そのため、後者が考えられる。白杖を使っている人、車いすでカフェに入店する人、3週間で見ない日がなかったといっても過言ではない。しかも、テレビでも下肢のない車いす女性が主役のドラマが放送されていた。英語が速かったためストーリーは理解しきれなかったが、ドキュメンタリー番組でないのは確かだった。日本のテレビで身体障がい者が取り扱われるときはドキュメンタリー番組が多いためとても新鮮に感じた。お店のにもお化粧やネイルをした男性店員さんも時々いた。街中からもテレビからも、イギリスは見た目にとらわれず「みんな」が自由に生活できる国だということが感じられた。また、上記したように日本とイギリスの町並みは全く異なる。それに合わせて救急車は蛍光の黄色。日本のような白色だと、町並みに同化して目立たなくなってしまうだろう。しかし、消防署は赤色ベースの建物。土地が違い文化が違うとこのような公衆衛生の部分も異なっていくとわかった。



今回のイギリス語学研修を終えて。私の反省は、「準備」だ。春休み序盤に行われるこの語学研修、つまりは後期期末試験の直後にあたる。私は試験勉強ばかりに一生懸命になってしまい、英語の勉強もイギリスについての勉強も一切できなかった。前日に夜更かしして勉強しなくていいようにもっと計画的に復習していくべきだった。イギリスに行くための準備は、主にイギリスについてもっと調べればよかったと後悔している。確かに英語の語彙力を増やしたり、リスニングに慣れる練習をしたりするのも重要だ。しかし、それ以上にイギリスの皇室についてやイギリスの有名な俳優や女優、有名な映画などの知識を身につけていくべきだったと後悔している。授業で先生に「これ知ってる？」と聞かれても全くわからない。観光していても風景には感動するがこの観光地が何のためにあるのかわからない。実際に休日にバッキンガム宮殿に行ったのだが、何のための建物なのかもそこで何が有名なのかも全く知らなかったため、バッキンガム宮殿を風景の一部としてとしか楽しめなかった。予習ひとつでもっとイギリスを楽しめたのかもしれない。

そもそも私は英語圏の土地で語学研修をして英語力を向上させたい、日本と海外の違いを体感してみたいと思い、この語学研修プログラムに参加した。イギリスに行くまでは、イギリスもアメリカも同じようなものだと思っていた。どちらも英語で暮らす土地、同じものだと思い込んでいた。しかしイギリスに着いてこの思い込みはぶち壊された。私たちが普段学校で学ぶ英語はほとんどがアメリカ英語。だがイギリスはもちろんイギリス英語が使われる。例えば映画はアメリカ英語では movie だがイギリス英語では film。アメリカ英語では theater だがイギリス英語では theatre と綴られる。発音もイギリス英語のほうが t の発音がしっかりしていると感じた。だからインターナショナルスクールで授業を受けるとき少し混乱した。自動車の交差点もアメリカとイギリスは逆回り。イギリスに行くと初めてアメリカとイギリスは同じ英語圏だが全く違う場所だ、と痛感した。



この3週間で英語が喋られるようになったかと聞かれればそうではない。しかし、英語を話すこと、外国人とコミュニケーションをとることに対しての壁が低くなったと実感している。日本語が一切通じない地でも自分の思いをなんとかして伝えることができるという自信にも繋がった。そして、もっと日本と外国の違いをみてみたい、改めて客観的に日本をみてみたい、と思い、イギリス以外の海外にも興味を持つようになった。今回の経験だけで満足せずに自分の英語力を鍛え続ける決心をするきっかけにもなった。そう考えるとカンタベリーでの3週間の語学研修は絶対に私の大学生活、そして人生において大きな糧になったと胸を張って言える。このような貴重な経験へと背中をおしてくれた家族、補助金での援助やイギリスとの連絡をとってくださった大阪府立大学のスタッフさん、3週間サポートし続けてくださったコンコルドインターナショナルスクールの先生、フタツツさん、イギリスでの生活をーから教えてくださったホストファミリーの皆さん、本当にありがとうございました。